

視覚障害者スポーツ競技におけるクラス分類 およびカテゴリー分類の現状と課題

佐藤 紀子

Discussion on the present situation regarding sight classification and categorization of sports for the visually impaired and related issues

Noriko Sato

1. はじめに

スポーツで必要とされる眼の能力は「スポーツビジョン」と呼ばれている。「スポーツの場での眼の役割は非常に大きく、たとえ眼で見ること以外の五感が失われてもスポーツをすることは可能であるが、眼が見えなくなってしまうとほとんどの競技をすることができなくなってしまふ。われわれはスポーツをする際、おそらく99%以上の情報を眼から得ている。」というスポーツビジョンの研究者がいる¹⁾。

一般に晴眼者はスポーツや身体活動を行う際に、変化する周囲の状況や相手選手の動きなどを眼で見、瞬時に判断しながら体を動かしている。確かに、視覚はスポーツに関連の深い感覚であるといえるが、その視覚に障害のある者も、実に様々なスポーツ活動に参加している事実があることを忘れてはならない。

視覚障害者の競技スポーツとしては、マラソンが有名であろう。視覚障害者スポーツの国際的な組織である International Blind Sport Federation: 国際視覚障害者スポーツ連盟 (IBSA)²⁾によると、男子の世界最高タイム (2006年9月現在) は、一番障害の程度の重い B1 クラス (後述) では、ポーランドの FERREIR-

A Carlos 選手の 2:38:27 (2000年シドニーパラリンピック)、また、B3 クラスではアメリカの TALBOTT Carlos 選手の 2:22:55 (1988年ソウルパラリンピック) である²⁾。日本ではサウンドテーブルテニス (盲人卓球)、フロアバレーボール (盲人バレーボール)、グランドソフトボール (盲人野球) などが古くから盲学校を中心に行われており、馴染みの競技である。

視覚障害者がこういった競技スポーツを行う際には、保有する能力を発揮できるような種々の工夫が必要となる。その中の一つとして、障害の程度や見え方の程度による不公平がないよう、「クラス分類」「カテゴリー分類」が行われている。

本稿では視覚障害者スポーツの特性に触れ、障害の程度による「クラス分類」、国内外で行われているスポーツ競技、各競技におけるクラス分類を基にした「カテゴリー分類」の現状を概観し、クラス分類およびカテゴリー分類における課題を考察する。

2. 視覚障害者スポーツの特性

一般に晴眼者は、空間に関する情報の多くを視覚から得ている。その視覚に障害がある場合、空間に関する情報の入手は、量的にも質的にも

日本大学歯学部 健康科学
〒101-8310 東京都千代田区神田駿河台 1-8-13
(受理: 2006年9月29日)

Department of Health and Sports Sciences, Nihon University School of Dentistry
1-8-13 Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo 101-8310, Japan

制限されるが、聴覚や触覚等により情報を得ることができる³⁾。視覚障害者がスポーツを行ううえでは、保有する感覚を活用して情報を得られるよう、ルールや用具、施設の工夫、晴眼者の補助、また選手間の障害の程度の差を考慮し、競技を公平に行うための工夫が必要となる。

(1) ルールの工夫

一般に実施されている競技の多くは、そのままでは視覚障害者には適用できない。そのため視覚障害者の特性に配慮したルールの工夫がなされている。例えば、球技においては、空間でボールをとらえることは困難であるので、フロアバレーボールやサウンドテーブルテニスのようにボールはコート内を転がすことが基本となる。また、ゴールボールのように一般的には実施されていない、視覚障害者のために考案された競技もある。

(2) 用具および施設の工夫

視覚障害者のスポーツの多くは、視覚障害者が保有する感覚を活用できるよう、用具や施設に工夫がなされている。例えば、サッカーでは音の鳴るボールを使用し、射撃やアーチェリーでは、的を狙う際、聴覚や触覚で判断できるような装置を使用している。またゴールボールのように触覚で位置確認ができるよう、コート上にロープを貼り付けるなどの施設の改良も行われている。

(3) 晴眼者の補助

視覚障害者の目の役割をし、視覚情報を適切に伝えるために、競技によっては晴眼者による補助が行われる。晴眼者の関わり方には、タンデム自転車のように視覚情報を伝えるだけではなく、晴眼者の競技力も成績に影響を及ぼすものから、パワーリフティングのように試合場まで誘導するだけといった、競技結果には影響を与えないものなど、様々な程度がある。

(4) クラス分類、カテゴリ分類

視覚障害といっても、全く何も見えない者か

ら普通の文字が読める者、視力は良いが視野が極端に狭い者など様々な見え方や障害の程度がある。競技によっては、このことが結果に影響を与える場合がある。そこで障害の程度による不公平をなくすために、障害の程度、見え方の程度に応じた「クラス分類」と、このクラス分類を基に、各競技が設定した競技区分である「カテゴリ分類」がなされている。

3. 海外および日本の視覚障害者スポーツ競技におけるクラス分類の現状

視覚障害者スポーツの国際組織としてIBSAがある。IBSAは1981年に設立され、108の国と地域が加盟しており、15競技について世界的、地域的な選手権大会の開催に携わっている⁴⁾。

日本には、IBSAのような視覚障害者スポーツのみを扱う組織はないが、障害者スポーツ全体の普及・振興を図ることを目的とした組織として、財団法人日本障害者スポーツ協会：Japan Sports Association for the Disabled (JSAD)が1965年に設立された。また、競技スポーツ分野の促進のため、1999年に日本パラリンピック委員会：Japan Paralympic Committee (JPC)がJSADの内部組織として発足した。JPCは日本を代表する組織として、国際パラリンピック委員会：International Paralympic Committee (IPC)、IBSA等に加盟し、国際競技大会への選手団派遣や国内の選手強化を実施している⁵⁾。

表1は、視覚障害者スポーツ競技における障害の程度による、IBSAと全国障害者スポーツ大会^{#2)}でのクラス分類である。IBSA、全国障害者スポーツ大会ともに、障害の程度によって3つのクラス分類^{#3)}をしている。IBSAのクラス分類にあたっては、両眼とも可能な限りの矯正視力でなければならない。つまり、コンタクトレンズまたはメガネを使用している選手は、試

表1 視覚障害者スポーツ競技における障害の程度によるクラス分類

IBSA の分類		全国障害者スポーツ大会での分類	
B1	視力0から光覚までの者で、いかなる距離、方向からも手の形が見分けられない	1	視力0から光覚弁まで
B2	手の形の認知可能から視力が2/60(0.03)までか、視野が5度まで、あるいはその両方	2	視力手動弁から0.03まで、視野5度以内
B3	視力が6/60(0.1)までか視野が20度まで、あるいはその両方	3	その他

合時にそれらを着用するか否かに関わらず、クラス分け診断の際には着用が義務付けられている⁶⁾。一方、全国障害者スポーツ大会では、矯正後の良い方の視力で判定されるが、実際にクラス分け診断が行われるわけではなく、身体障害者手帳を基準としてクラス分類されている⁷⁾。

IBSAの基準と全国障害者スポーツ大会での基準には違いがみられる。例えば、IBSAの基準には「手動弁」という障害の程度がないために、選手が手動弁の場合には、どのクラスに該当するか明確でないという問題がある。

また、全国障害者スポーツ大会での一番障害の程度の軽い「3. その他」のクラスの上限は、身体障害程度等級6級「一眼の視力が0.02以下、他眼の視力が0.6以下のもの」⁸⁾であり、IBSAの基準の上限と異なっている。つまり障害が軽度であると、国際的な大会には参加できないことになる。

4. 海外および日本で実施されている視覚障害者スポーツ競技の概要

ここでは、視覚障害者のスポーツ競技として、IBSA公認競技およびJSAD登録競技(表2)の概要を説明する。

(1) IBSA公認競技⁹⁾

a. アルペンスキー

音源でコースを誘導する「ガイドスキーヤー」と一緒に滑ることが義務付けられている。声やポールをたたく音、無線通信など音源による誘導のみが認められており、身体的な接触を伴う誘導は認められない。ダウンヒル、スーパー-G、ジャイアントスラローム、スラロームの4種目がある。

b. 陸上競技

ハードルや障害物走、棒高跳びなどを除いて一般の陸上競技と同じように、トラック競技、フィールド競技、ロードレースが行われる。競技は一般の陸上競技規則に準じて行われるが、B1、B2クラスの選手は、伴走者による補助、跳躍方向や投擲方向などに対する音源による指示が認められている。

c. アーチェリー

一般的にアーチェリーは的を狙うのに方向性と狙いの高さが重要となる。晴眼者はサイト(照準器)を使用して眼で的を狙うが、視覚障害者はそれができない。そこで、コーチが設置した、立ち位置や体の向きを決めるためのフットロケータとカメラの三脚の上に取り付けられた触知照準器を用いる。選手は弓を持つ手の甲で触知照準器に触れて方向や狙いを定める。

d. サッカー

音が鳴るように中に金属の粒を入れたボールを使用する。ピッチはフットサルと同じ、約20m×40mで、サイドライン上にフェンス(ボード)が設けられている。1チームはB1クラスのフィールドプレーヤー4名とゴールキーパー

表2 海外および日本で実施されている視覚障害者スポーツ競技

Sports	IBSA	JSAD
Alpine Skiing	○	○
Athletics	○	○
Archery	○	※
Football	○	○
Goalball	○	○
Judo	○	○
Nine Pin Bowling	○	—
Nordic Skiing	○	○
Powerlifting	○	○
Showdown	○	—
Shooting	○	○
Swimming	○	○
Tandem Cycling	○	○
Ten Pin Bowling	○	○
Torball	○	—
Golf	—	○
Sailing	—	○
Floor Volleyball	—	○
Flying Disk	—	○
Grand Softball	—	○
Synchronized Swimming	—	○
Table Tennis	—	○
Tennis	—	○

※ JSAD に団体としては登録しているが、視覚障害者はまだ含まれていない

の計5名で編成される。ゴールキーパーだけは、ボールを空間でとらえることが可能なB2, B3クラスの選手または晴眼者が行う。フィールドプレーヤーは、危険防止のためヘッドギアをつけること、障害の程度の差をなくし公平に競技が行えるようにするためにアイマスクをつけ

ることが義務付けられている。選手以外に「コーラー」と呼ばれるコーチが、相手ゴールの裏から味方選手に指示を出すことが認められている。B2, B3クラスの選手は、これとは別のルールで競技を行う。ボールの色や光の条件についての規定がある以外は、晴眼者のフットサルとほぼ同じルールである。

e. ゴールボール

視覚障害者のために考案された球技である。コートは9m×18m。それぞれのエンドライン上に幅9m、高さ1.3mのゴールが設けられている。位置確認のためコート上にロープが貼られている。1チーム3名で編成され、鈴を入れたボールを交互にゴールめがけて転がして投球し合う。ディフェンスの際は味方選手全員が体全体を使ってゴールを守り、相手ゴールにボールを入れた得点を競い合う。障害の程度による差をなくすため、全員がアイシェードをつけることが義務付けられている。

f. 柔道

一般の競技規則が適用されるが、試合開始の際は、お互いに組あい、相手の位置を確認してから始めることになっている。「はじめ」と声のかかる前に組んだ手を放すことは認められていない。道場や胴着などは、一般の柔道と同じであるが、B1クラスの選手や聴覚障害を併せ持つ選手は胴着に決まったマークをつけることになっている。

g. ナインピンボウリング

日本で行われているボウリングはテンピンボウリングであるが、ナインピンボウリングは、その原型とも言われ、東ヨーロッパを中心に愛好されている。テンピンボウリングよりも小さなボールとダイヤモンド型に立てられた9本のピンを使用する。晴眼者ガイドが投球方向や投球方法などを指示しても良いことになっている。ただし、投球時の身体的な接触を伴う指導は禁止されている。B1, B2クラスの選手は投

球位置から、両脚を広げて立ち、脚の間からボールを投球する。B3クラスの選手は、短い助走をして投球する。

h. ノルディックスキー

選手はガイドスキーヤーの発する声や音を頼りに滑る。ガイドによる身体的な接触は認められていないが、カーブやくだりなどの危険な場所では「ホールディングゾーン」といって身体的な接触を伴う誘導が認められる箇所がある。ノルディックスキーにはクロスカントリースキー競技とバイアスロン競技がある。クロスカントリースキーには、雪上に2本平行にひかれたトラックに沿って滑る「クラシカル走法」と、スキーを逆ハの字にして滑る「フリー走法」がある。バイアスロンは、クロスカントリースキーの途中で射撃を行う競技である。射撃では、的のある方向に銃口が近づくと、ヘッドホンから聞こえる音の高さが変化する装置（音式スコープ）を用い、音を聞き分けて的を狙う。

i. パワーリフティング

スクワット、ベンチプレス、デッドリフトの3種目、各3試技の最大挙上重量の総計を競う。視覚障害者に適合させたルールや用具の工夫は少なく、晴眼者の補助もプラットフォームに上がる際の誘導くらいである。パワーリフティングは、視覚障害者が晴眼者と同じ舞台上で戦える数少ない競技の一つといわれている。

j. ショウダウン

日本では馴染みがないが、視覚障害者のために作られた敏捷性を必要とする球技である。2名の選手によって行われる。障害の程度の差をなくするため、全員がアイシェードを着用する。ゲームは、センターボードスクリーンとそれぞれのエンドにゴールポケットのある長方形のテーブルで行われ、ラケットと中に金属の粒が入ったボールが使われる。センターボードスクリーンの下を通して、相手のゴールにボールを入れ、またそれを阻止しようとするゲームであ

る。視覚障害者用卓球と間違っていて表現されるが、この競技は、相手のゴールポケットにボールが入ると得点となる。

k. 射撃

エアライフルでの的を狙って撃ち、得点を競う。選手が使用するライフル銃には、的のある方向に銃口が近づくとヘッドホンから聞こえる音に変化していく装置（音式スコープ）を用いる。立射、座射、伏射がある。射撃の結果等を伝達するために晴眼者の補助が認められているが、競技中の指導をしてはならないことになっている。

l. 水泳

ルールや用具の工夫は比較的少ない。ゴールタッチやターンの時にケガをする恐れがあるため、コーチが指示棒（棒の先にスポンジなどがついたもの）を使って選手の頭をたたき、壁が近づいていることを知らせる。これをタッピングという。このタイミングひとつで勝敗がわかることもあり、選手に合ったタッピングの技術が必要となる。また、リレーの際、選手は近づいてくる前泳者が見えないので、コーチが選手に飛び込みのタイミングを指示してよいことになっている。

m. タンデム自転車

二人乗り自転車に「パイロット」と呼ばれる晴眼者が前に乗り、視覚障害選手が後ろに乗って競技を行う。競技は、バンクを使用して行うトラック競技と一般の道路を使用して行うロードレースがある。また、トラック競技の種目には、2チームずつで勝敗を競い合うスプリントや個人追い抜き、団体追い抜き、タイムを競い合うタイムトライアルがある。

n. テンピンボウリング

B1、B2クラスの選手は、投球方向確認のためにアプローチ上に設置された「ガイドレール」という手すりを使用することが認められている。これを使用することによって、投球方向に

対し真っ直ぐ助走することができる。残ピンを確認することが困難であるので、残ピン確認やボールの軌道などの情報を晴眼者から受けることができる。これ以外は、ガターもファウルも採用されており、一般の競技規則が適用される。

o. トールボール

ゴールボールと同様に視覚障害者のために考案された球技である。ゴールボールと大変似ているが、コートは7m×16mと一回り小さい。コート上方にロープが横に3本張られ、ボールはその下を通さないとならない。位置確認用のマットがコート上に敷かれている。1チーム3名で編成され、音の鳴るボールを交互にそれぞれのエンドライン上に置かれたゴールめがけて転がして投球し、守備を行う。障害の程度の差をなくすため、アイシェードをつけることが義務付けられている。ボールはゴールボールより一回り小さく軽い。中央ヨーロッパやラテンアメリカで盛んに行われている。

(2) JSAD 登録競技 (IBSA 公認競技を除く)

1) 国際的な大会が実施されている競技

a. ゴルフ¹⁰⁾

ショットするために必要な視覚的な情報、スタンスの方向や目標までの距離、パッティングラインなどは、同行する晴眼者からアドバイスしてもらう。そのほかは晴眼者のゴルフとほぼ同じである。

b. セーリング¹¹⁾¹²⁾

2名の視覚障害者が舵取りと大きい帆を操る。2名の晴眼者が小さい帆を操り、風の方向や状況説明をする。合計4名でセーリングをするのが基本となっている。

なお、パラリンピックでは、視覚障害者だけでなく、身体機能障害、脳性麻痺のある選手と一緒に競技を行う。1人乗り(視覚障害以外の障害者)と3人乗りの2種目がある。障害の程度で選手個々にポイントが決められ、3人乗りでは合計ポイントの上限が決められている。

2004年アテネパラリンピックの日本チームは身体機能障害(切断, 車椅子)と視覚障害(全盲)者でチームが編成された。

2) 主に日本国内で実施されている競技

a. フロアバレーボール¹³⁾

ボールを転がして行うバレーボール。コートは9m×18m、ボールはバレーボール5号球を使用し、ネットと床面の間に30cmの空間を設け、ボールはそこの下を通す。3名の前衛プレーヤーは、アイマスクを着用し、ネット際にしゃがんだ姿勢でプレーし、後衛プレーヤーは、保有視力を利用して、立った状態でプレーする。6人制バレーボール規則に準じて行われる。

b. フライングディスク⁷⁾¹⁴⁾

的を狙う正確さを競う「アキュラシー」と距離を競う「ディスタンス」がある。アキュラシーは、丸い形をしたアキュラシーゴールめがけて10回ディスクを投げ、何回通過するかを競う。5mの距離から投げるディスリート5と、7mの距離から投げるディスリート7の2種目がある。ディスタンスは3回ディスクを投げ、その距離を競う。足留材に丸棒が設置され、投げる方向はそれに触れることで分かるようになっている。また、アキュラシーでは競技役員が音源によりゴールの方向を示す。全国障害者スポーツ大会の正式種目の中で、肢体不自由、視覚障害、聴覚障害、知的障害、全ての障害者が同じ条件で競技する唯一の競技である。

c. グランドソフトボール⁷⁾¹⁴⁾

ソフトボールの規則を準用し、視覚障害者用にルールを工夫している。1チームは、右遊撃手を加えた10名で編成され、全盲選手を4名以上入れないとならない。なお、全盲選手はアイシェードをつけることが義務付けられている。ボールはハンドボールを使用する。全盲選手がピッチャーとなり、投球はキャッチャー(弱視選手)の手たたきや声を頼りにアンダースローで転がすように行う。弱視選手と全盲選手に対

するストライクゾーンが異なっており、全盲のバッターは、ボールの転がる音を頼りに打撃できる。安全性を確保するため、守備と走塁それぞれに専用ベースを設けている。また、各塁のコーチーズボックスにコーチを置き、主に全盲走者への進塁誘導を行う。全国障害者スポーツ大会の正式種目として行われている。

d. シンクロナイズドスイミング¹⁵⁾

視覚障害者だけでなく、他の障害を持つ選手も一緒に参加できる。ソロ、デュエット（障害者1名以上）、トリオ（障害者2名以上）、チーム（4名以上、障害者半数以上）がある。視覚障害者の演技中は安全確保のためホイッスルなど音声による合図をすることが求められる。

e. サウンドテーブルテニス・卓球⁷⁾¹⁴⁾

一般的な卓球を行うことが困難な視覚障害者のために考え出された卓球を「サウンドテーブルテニス」という。卓球台のエンド、サイドの手前半分にフレームをつけ、ネットは台から4.2cmの空間を設けて張られる。ラバーの貼られていないラケットを使用し、金属球の入った卓球ボールを転がして打ち合う。自陣のエンドフレームにボールが触れる前に打ち返すことが基本となる。選手はアイマスクを着用することが義務付けられており、相手選手の打球の強さや方向などを音で判断する。なお、障害の程度の軽い「3」クラスの選手は、晴眼者と全く同じように卓球を行う。全国障害者スポーツ大会の正式種目である。

f. 視覚ハンディキャップテニス¹⁶⁾

バドミントンコートと同じ大きさのコートを使用する。バウンドした時に音が鳴るように、スポンジボールの中にサウンドテーブルテニス用の球を入れたものをラケットで打ち返す。B1クラス¹⁴⁾の選手は、3バウンド後の返球が認められており、B2、B3クラスの選手は、2バウンド後の返球が認められている。視覚障害者の球技の中で、ボールを空間でとらえるのが基本

となる数少ない競技の一つである。

5. 視覚障害者スポーツ競技におけるクラス分類を基にしたカテゴリー分類

一般のスポーツ競技は男女別に、また格闘技などでは体重別に行われている。これは競技における、いわばカテゴリー分類であり、その競技の特性に応じて公平性を保証することを目的としている¹⁷⁾。視覚障害者の競技においては、これらの一般的な競技区分に加え、障害の程度によるクラス分類を基にしたカテゴリー分類が設けられている。このカテゴリー分類の仕方は競技によって異なっている。ここでは、競技ごとのカテゴリー分類をタイプ別に区分することを試みる。

表3はそれぞれの競技におけるカテゴリー分類をタイプごとに区分したものである。IBSAと全国障害者スポーツ大会では、クラス分類の基準に若干の違いがあるが、両者とも3つのクラス分類を採用しており、ここでは同じ3分類として扱った。

I. 3クラス採用型

陸上競技、水泳、ゴルフ、セーリング、ナインピンボウリング、テンピンボウリングでは、障害の程度による3つのクラス分類をそのままカテゴリー分類として採用している。

II. クラス統一型

このタイプでは、3つのクラスを統合し、1つのカテゴリーで競技が行われる。表中の半数以上の競技がこのタイプに属することになる。これらの競技は、競技方法の違いから、さらに以下の4つのタイプに分類することができる。

II-1. アイシェード型

ゴールボール、トールボール、ショウダウンのように全員がアイマスクやアイシェードをして競技を行う。B2やB3の選手であっても、保有する視覚が制限される。

II-2. ノン・アイシェード型

表 3 視覚障害者スポーツ競技におけるクラス分類を基にしたカテゴリー分類

B1/1	B2/2	B3/3		Sports	Type
○	○	○		Athletics Golf Nine Pin Bowling Sailing Swimming Ten Pin Bowling	I
	○			Goalball Showdown Torball	II-1
	○			Flying Disk Judo Powerlifting Shooting Synchronized Swimming Tandem Cycling	II-2
				Alpine Skiing Nordic Skiing	II-3
				Floor Volleyball Grand Softball	II-4
○	○			Football	III
○		○		Table Tennis	
○	○	○	○	Archery	IV
○	○	○	○	Tennis	

タンデム自転車, 射撃, フライングディスク, 柔道, パワーリフティング, シンクロナイズドスイミングでは, クラス間の障害の程度の差を特に考慮せずに同じ条件で競技を行う。

II-3. 係数型

スキー競技では, 3つのクラスごとにそれぞれ係数が設定され, 実際の記録(実走タイム)にその係数を掛けた修正記録(修正タイム)で競われる。

II-4. 役割分担型

フロアバレーボールとグランドソフトボールでは, 視覚障害という1つのカテゴリーの中で, 「全盲」と「弱視」で役割分担をする。「全盲」は視覚を用いず競技を行い, 「弱視」は保有する視覚を用いて競技を行う。弱視選手が全盲選手

として競技に参加することも可能であるが, その際は必ずアイマスクやアイシェードを着用し, 保有する視覚を制限して競技を行う。

III. 2種目型

卓球, サッカーでは, 1つの競技の中に2つの種目があると考えることができる。保有する視覚を用いることのできる選手とそうでない選手で, それぞれ異なったルールで競技が行われている。

IV. 4クラス型

アーチェリーでは, 視野を考慮せずに視力のみを用いてカテゴリーを3つに分け, さらに視野20度以下というIBSAの基準内であれば, 視力が0.1以上であっても競技に参加できるように, 4つめのカテゴリーを設けている。また, 視覚ハンディキャップテニスでは, IBSAのB3の基準より視力, 視野ともに障害の程度の軽い選手の参加を認め, 4つめのカテゴリーを採用している。

6. 視覚障害者スポーツ競技におけるクラス分類およびカテゴリー分類の課題

ここでは, 現行の視覚障害者スポーツ競技におけるクラス分類とカテゴリー分類について, 3つの課題を挙げる。

(1) クラス分類基準の統一

IBSAと全国障害者スポーツ大会では, 若干異なったクラス分類の基準を用いている。IBSAが競技スポーツの組織であるのに対し, 全国障害者スポーツ大会はどちらかというと障害者スポーツの振興を目的としている。それぞれの目的に違いはあるが, 混乱をなくすために, クラス分類の基準については一本化されていくべきであろう。

(2) 競技特性に応じたクラス分類, カテゴリー分類の検討

カテゴリー分類タイプ, 3クラス採用型では,

全ての競技において同一のクラス分類基準で、そのままカテゴリー分類が行われている。障害の程度による不公平をなくすために設けられたはずの「クラス分類」が実際には公平性が確保できていない場合がある。

テンピンボウリングを例にとると、同じ B2 クラス（カテゴリー）の選手でもガイドレールを使用しないと投球できない選手とガイドレールを使用しないで投球が可能な選手がいる。2006 年 9 月に開催された第 5 回全日本視覚障害者ボウリング選手権大会に出場した B2 クラス（カテゴリー）選手のスコアを見ると、ガイドレール使用選手（4 名）の 1 ゲームあたりの平均スコアは 78 点であり、ガイドレール未使用選手（12 名）では 125 点であった。ガイドレール使用選手のスコアの方が明らかに低い現状がある。

全ての競技で同一のクラス分類基準を使用するのは、公平性が確保できにくいと考えられる。競技ごとで、その競技特性を踏まえたクラス分類を検討し、それに基いたカテゴリー分類をしていく必要がある。

(3) 妥当な係数の算出

視覚障害者に限らず、障害者の競技スポーツはカテゴリーごとで競われるため、メダル数が多くなる。例えば、パラリンピックの陸上競技 100 m の金メダリストが何人もいる状態である。また、参加人数も少なくなるためにメダルが獲得しやすい競技もあり、メダルの価値をも低下させることになっている。この問題を解消するために、スキー競技では、3 つのクラスごとに異なる係数を設け、それを実際の記録に掛けた「修正記録」を用い、1 つのカテゴリーで競技が行われている。しかしながら、妥当な係数は天候やコースの状態等、様々な要因によって変わってくると考えられる。透明性を確保した上で、各クラスの競技力に応じた合理的な係数を算出できるかが課題であろう。

7. おわりに

スポーツを実施する際に重要となる視覚に障害があっても、ルールや用具の工夫、晴眼者の補助によって、国内外で多くのスポーツが実施されている。また、競技の公平性を維持するために、障害の程度によるクラス分類、そのクラス分類を基にした競技ごとのカテゴリー分類が行われている。しかしながら、このクラス分類、カテゴリー分類には課題も多く、今後、更に視覚障害者競技スポーツを発展させていくためには検討が必要であろう。

謝辞：本研究の一部は、日本大学歯学部佐藤研究費によるものである。

注

注 1) 本来は、IBSF と呼ぶべきであるが、設立当時の名称が International Blind Sport Association であったため、現在も略称として IBSA を使用している。

注 2) 厚生労働省、財団法人日本障害者スポーツ協会等が主催する国内最大の障害者のスポーツ大会である。国民体育大会終了後に、同じ開催地で行われている。この大会は、競技性よりも、障害者の社会参加推進や障害者に対する国民の理解を深めることを目的としている。

注 3) 全国障害者スポーツ大会では、陸上競技ではクラスを「24, 25, 26」、水泳では「23, 24, 25」といったように競技によってクラス分類の呼び方が違っている。ここでは、「1, 2, 3」という表現を用いた。

注 4) 視覚ハンディキャップテニス は IBSA の公認競技ではなく、主に日本国内でのみ競技が行われているが、IBSA のクラス分類を採用している。

文 献

- 1) 正化圭介 (2002) ものが見えるメカニズム. スポーツビジョン—スポーツのための視覚学. 第2版. 真下一策編, ナップ, 東京, p1
- 2) IBSA. Athletics sections Records World records Athletics Outdoor Men. International Blind Sports Federation.
[http://www.ibsa.es/eng/deportes/athletics/records.asp?record=MM\(2006-9-6\)](http://www.ibsa.es/eng/deportes/athletics/records.asp?record=MM(2006-9-6))
- 3) 香川邦夫 (2005) 三訂版視覚障害教育に携わる方のために. 慶応義塾大学出版会, 東京
- 4) IBSA. About IBSA. International Blind Sports Federation.
[http://www.ibsa.es/eng/ibsa/presentacion.htm\(2006-9-6\)](http://www.ibsa.es/eng/ibsa/presentacion.htm(2006-9-6))
- 5) 財団法人日本障害者スポーツ協会 (2005) 財団法人日本障害者スポーツ協会・日本パラリンピック委員会. 財団法人日本障害者スポーツ協会, 東京
- 6) IBSA. IBSA Medical Procedures. International Blind Sports Federation.
[http://www.ibsa.es/docinteres/PROCEDIMIENTOSDEDEPARTAMENTOMEDICO/IBSAMedicalProceduresrevised.doc\(2006-9-6\)](http://www.ibsa.es/docinteres/PROCEDIMIENTOSDEDEPARTAMENTOMEDICO/IBSAMedicalProceduresrevised.doc(2006-9-6))
- 7) 財団法人日本障害者スポーツ協会 (2006) 全国障害者スポーツ大会競技規則の解説. 第6版. 財団法人日本障害者スポーツ協会, 東京
- 8) 身体障害者福祉法施行規則 (昭和25年4月6日厚生省令第15号) 別表第5号 (第5条関係) 身体障害者障害程度等級表
- 9) IBSA. Technical Department Rules. International Blind Sports Federation.
[http://www.ibsa.es/eng/\(2006-9-6\)](http://www.ibsa.es/eng/(2006-9-6))
- 10) Manabu・Springwater・Shimizu. 視覚障害者とゴルフ. 日本視覚障害者ゴルフアース協会.
[http://www.vig-jp.com/rule.htm\(2006-9-6\)](http://www.vig-jp.com/rule.htm(2006-9-6))
- 11) JBSA. 当協会について. 日本視覚障害者セーリング協会.
[http://www.jbsa.jp/weblog/archives/cat75/index.html#000739\(2006-9-6\)](http://www.jbsa.jp/weblog/archives/cat75/index.html#000739(2006-9-6))
- 12) ヨットエイドジャパン. パラリンピックセーリング競技. 特定非営利活動法人ヨットエイドジャパン.
[http://www.yacht-aid.jp/paralympicp.htm\(2006-9-6\)](http://www.yacht-aid.jp/paralympicp.htm(2006-9-6))
- 13) 財団法人日本障害者スポーツ協会・日本パラリンピック委員会 (2004) 障害者のスポーツ. 財団法人日本障害者スポーツ協会, 東京
- 14) 財団法人日本障害者スポーツ協会 (2006) 全国障害者スポーツ大会競技規則集. 第7版. 財団法人日本障害者スポーツ協会, 東京
- 15) 全国障害者シンクロナイズドスイミング連絡会. 第15回記念障害者シンクロナイズドスイミングフェスティバル実施要項. 全国障害者シンクロナイズドスイミング連絡会
[http://web.kyoto-inet.or.jp/people/spo-shin/sinkuro/fesu2006.htm\(2006-9-6\)](http://web.kyoto-inet.or.jp/people/spo-shin/sinkuro/fesu2006.htm(2006-9-6))
- 16) 日本サウンドテニス協会. 標準ゲーム規定. 日本ハンディキャップテニス連盟
[http://www.jhtf.org/jhtf2102.html\(2006-9-6\)](http://www.jhtf.org/jhtf2102.html(2006-9-6))
- 17) 矢部京之助, 草野勝彦, 中田英雄 (2004) アダプト・スポーツの科学—障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論. 市村出版, 東京